

再生を繰り返しながら発達していった子ども

北 村 圭 三

Summary

Child's Transformation and Maturation Process

Keizo Kitamura

There was a child who was identified as being a sufferer of a developmental disturbance of primary autonomic function. The child was autistic. He was sent to the child guidance centre when he was 3 years old. Since then, he was under therapeutic treatment until he was 7 years old. This paper is a case report which discusses and examines the child's maturational process over a period of 4 years. He did transformation again and again in play. He played Songokū, a driver, a teacher, a delinquent boy and Momotarou. Through the transformation process the good-bad objects that had remained split in his self were integrated. And he achieved sufficient development to adjust himself to the outer world with real ego.

運動機能や認知機能などの「1 次的自律的自我機能」(Hartmann, H.)の発達障害を基底に持っている子どもは、環境から差し出される外的対象を取り入れて、対象関係を健康的なかたちで展開させていくことが、どうしてもスムーズにいきにくい。ウイニコットにならっていえば、この種の子どもは「ほどよい母親」とのあいだで展開される「絶対的依存」の段階から「相互依存」の段階、「独立」の段階への発達過程への道を歩むことがスムーズにいきにくい。それ故に、子どもは、どうしても健康な対象関係の発達から逸脱した自閉的な内的世界の殻に閉じこもりがちになる。そうすると、この種の子どもの治療には、内的現実でも外的現実でもない「中間領域」(Winnicott, D. W.)である遊びの世界を、環境がどのように準備、提供し、その領域を子どもといかにうまく共有することができるかが重要な鍵を握ると考えられる。具体的にはプレイセラピー場面が、子どもに中間領域を提供する場であるとされている。しかし、準備されたプレイセラピー場面が、つねに子どもにとって適切な中間領域を提供しているとは限らない。つまり、プレイセラピー状況が、セラピストの力量によって左右されるとともに、種々の事情によって構造的変化が起こることは避けられない。それは、この種の子どもにとっては大変辛いことである。本論文で扱う事例は、遊びという中間領域を保障するプレイセラピーを基本にしながらも、セラピー状況の構造的変化が度々起こり、3歳から9歳までの7年間もの長期に亘ったケースである。

そこで本論文では、子どもがそのような状況のなかで、幾度も対象を殺したり、或いは、生命の源である子宮を思わせる池やダムを度々登場させ、そのたびに再生を繰り返しながら、対象世界における自己の脱皮をしてきた過程、即ち対象関係を発達させてきた過程を報告し、検討していきたい。

生育歴・相談歴

一郎は父親32歳、母親27歳時に長男として誕生。妊娠・出産時とも異常なし。乳児期は「仏様」と呼ばれるほど大人しく、泣かなかった。母親は安心して内職した。人見知りもなかった。1歳3カ月のとき弟のお産のため田舎に帰り、祖父母から「この子は呼んでも反応がない おかしい」と言われて耳鼻科へ連れて行った。聴力は異常なかった。しかし言葉も出てこず、TVばかり凝視していた。弟の誕生の際も母親を求めず、母親が退院したときも全く寄り付かなかった。弟に対しても嫉妬しなかった。言葉の発達も遅く、3歳検診前後に初めて「マンマ」と発語した。検診後児童相談所に行った。児相において自閉的傾向を伴った発達遅滞児(DQ=54)のため母子通所グループ指導に参加することを勧められた。

一郎は3歳2カ月から半年間母子通所グループ指導に通い、引き続き家児相にて5歳10カ月まで1対1もしくは1対2の母子面接に通った。なお、この間の母子グループ指導経過については、記録が児相に残っていないので分からない。しかし、その後の家児相の記録によると、一郎は、視線を合わすことがなく、指を舐めていることが多かった。また家庭からの外出を極

度に怖がり、外出時には母親の身体にしがみついており、見知らぬ人に出会うと両手の拳をかたく握り締めて怖がった。大きい音に対しても、掌で口を押さえて怖がった。指を怪我すると、大変気にして、その指をかたく握り締めて寝た。そして寝る時は、いつも決まった毛布を四季を問わず肌身離さず抱いて寝た（注：この現象は小2迄続いた）。4歳で保育所に入ったが、他児と遊べず、いつも指を口にくわえていた。4歳8カ月になって2語文、3語文を話すようになったが、「××と言って」などの母親からの抱っこ言葉かけのみで、視線もあわず、会話にならなかった。

母子通所グループ指導

母子で家児相に通っていた一郎は、1年後に就学を控えて児相で再判定を受けた。一郎のDQは $81+\alpha$ にまで発達していた。この時点で母親から再び児相でのグループ指導の希望が出され、一郎は再び母子通所指導グループに入った。そこで筆者は初めて一郎と出会った。一郎が6歳の5月である。当初一郎の視線は穏やかであるが、ひとの視線を避けて空間を漂っている感じであった（G1：グループでの第1回セッションを表す）。一郎は母親に似て大柄であるが、その後グループ内の他児を怖がり、指を舐めて孤立している姿が目立った。そこで、これまでの経過を踏まえて、「抱っこ」（Winnicott）を保障しながら、一郎をグループに参加させるべく、女性セラピストが一郎につくことになった（G4）。特定の大人に見守られるなかで、一郎は他児から離れて、視線を避けるようにしてブロックでマンションを作り始めた。一郎はせっかく作ったマンションを他児に横取りされても全く抵抗せず、関係ないかのように独語しながら再びマンションを作った。耳をすましていると、「夜になりまちた 青くて暗い夜でちゅ」と呟いていた。この点を母親に確かめると、実際一郎は夜になるのを怖がるとのことであった。

抱っこを保障された一郎は、次第に二者関係（Winnicott）へと向かうようになり、セラピストに「逮捕ちゅる」「先生のバカ」と言うようになった（G10）。家庭でも、親に対して、おもちゃの手錠を持ち、TVの刑事になって「逮捕ちゅる」と執拗に迫った。但し、セラピストや母親の顔は決して見なかった。このような状態の続くなかで、前期のグループ指導が終わった。そして、一郎のみ後期のグループに引き続き参加することになった。一郎は、新グループでは最年長となった。やがて、一郎は遠くから誰に向かうともなく「逮捕ちゅる」と叫んだり（G16）、電話で「もちもち」と呼び掛けたり（G21）、自分が八百屋になって「いらっちゃい 野菜はいりまちゃんか」と呼びかけるようになった（G27）。しかし誰かが一郎の声に反応すると、すぐに電話を切ったり、「売りきれまちた」と店を閉めた。こうして一郎は周りからの反応を極端に怖がっているが、他児に関心を向け、外界からの取り入れが見られるまでになった段階で、後期の母子通所グループ指導が終了した。同時に就学を迎え、これ以上母子通所指導を児童相談所で継続することは、年齢対象制限のため不可能となった。しかし、就学後学校という三者関係の場でうまく適応できるとは考えられず、開かれた三者関係に発展していくためにも、二者関係の確立が大切なため、母親の希望のもとに筆者の属する大学の児童相談室にて、一郎は母子並行面接を受けることになった。なお、一郎は就学後、学校側の配慮で健常児学級に所属し

た。

母子並行面接

I 期; 学校から帰ると、「学校が面白くない」と独語していた一郎は、セラピストが同じであってもプレイルームが初めてのため、野球帽を真深に被り、視線をそらせたまま部屋のおもちゃを次々と触った。その間、左手の親指は常に舐めていた (31回: グループ指導からの通算回数)。しかし、次回には玄関に着くなり、「ちえんちええ (先生)」と大声で呼んで入ってきた。そして視線こそ避けているが、HTh (Th: Therapist の略) に「結婚したことがある?」「いつ生まれたの?」と聞いてきた (32回)。以後、一郎からの一方的な質問が続き、Th からの問い返しには、全く応えなかった。そのうちに HTh を「H ブー」と呼び、母親と面接している KTh (筆者) を「K ブー」と呼んだ。やがて、一郎は、質問に対して問い返してきた HTh を、銃で殺した (37回)。

II 期; HTh を殺した一郎は、次回にバケツに水を何度も汲んでは砂場に水を入れた。その際、床まで水浸しになった。これを見兼ねた HTh が、決して怒らず受容的に拭いて後始末した (38回)。一郎は、その様子を驚きの眼で見ている。何かを感じたらしい。そして、次の回、一郎は HTh に見えないようにして粘土を使って、何かを作り始めた。しばらくすると、「ケーキ」と言って、恥ずかしそうに HTh に差し出した。さらに、一郎は画用紙に四角い枠を描き、その枠内に、「にしのみや」と書いた (39回)。但し「や」の字が鏡映字であった。その後、口では「H のバカ」と言うが、一郎のサービスは続き、家庭で自分の作った青と緑の紙バッグや、裏に「H のりこにおしらせくらしせ」と書いた何色も重ね塗りしたなぐり絵を HTh にプレゼントした (40回・41回)。

次第に一郎の気分は高揚していき、ミニチュア牛乳瓶を手にして「天然果汁でおいちい H 牛乳」とか、自分の T シャツのマークを指して「H ちよくひん (食品) と書いてあるわ」と叫んだり (40回)、WB (ホワイトボード) に「あさのいくときのおしらせ〇〇〇 (大学名)」と書いたりした (41回)。母親も「一郎がここに来るのを楽しみにしています」と話された。

やがて夏休みに入り、一郎はかなり離れた水族館に行った時の魚を描いた絵を HTh に持ってきた (44回)。一見して魚と分かるまでに、絵は上達していた。そして、一郎は、この回ミルク飲み人形に水を飲ませながら、何度も「H はじめたん」と、名前を呼び替えて独り喜んだ (44回)。

III 期; 9 月に入ると一郎は「学校嫌やねん」と、初めて現実の学校のことを口にした。実際学校でも友達と遊べず、登下校は独り列から離れて歩いていた。そんな一郎は、受容的な HTh を再び銃で撃ち殺した。それから HTh に、ふと「お母さんに怒られたことがある?」と聞いてきた。「うん、あるよ。一郎ちゃんは?」と HTh が言う、初めて「お母さんはいつも大声で怒ってあります」と応えてくれた (45回)。それから一郎は HTh を、自分にとって一段と身近な存在とみなして行動した。来室すると、風船を必ず手に持ち、その感触を楽しみながら三輪車と乳母車に乗ったりした。あるとき一郎は風船の先の小さな膨らみを触って、ニッコリ笑い「おっ

ばい」と言って喜んだ(48回)。風船は、一郎にとってまさに母親の乳房だった。しかし、一郎は次第に風船だけで満足しなくなり、ついに HTh にタオルケットを被ぶせて、のしかかってきた(52回)。さらに次の回には HTh を座らせ、背後から押し倒して「背中見たる お臍見たる」と言って、HTh のトレーナーをめくろうとした。さすがに受容的な HTh も抵抗した。一郎は怒り、思い通りいかない HTh に悪態をついた(53回)。

その次の回、一郎は、HTh に対して願望を遂げられなかった代わりに、リカちゃん人形を裸にした(54回)。さらに、一郎の怒りは激しくなり、やがて一郎自らが、TV の遜吾空に変身して、砂場に HTh 山と名づけた砂山を作り、刀で激しく攻撃した(55・56回)。勢いに乗った一郎の怒りは、プレイルームを越えて面接室の KTh にも向けられた。一郎は KTh をプレイルームに引っ張り込み、刀を持たせ、その KTh を切りまくった(57回)。こうして2人をやっつけて満足した一郎は、次回以後 KTh をプレイルームに同室させた。そして KTh と HTh を結婚させた。そのあと一郎を挿んで3人で並んだ記念撮影を、鏡に向かって行なった(58回)。鏡を通しての一郎の顔は、とても嬉しそうだった。これを機に、一郎の視線が我々と合ってきた。一方家庭でも、一郎は遜吾空に夢中になり、おもちゃを家一杯にひろげ、それを動かすと怒った。また TV のアナウンサーが雨の予報をすると、そのアナウンサーに向かって「お前が悪い」と怒る有様だった。さらに突然母親の背中に飛び付いたり、乳房を触ったりした。そして母親が耐えかねて、「いい加減にしてよ」と言うと、「豚! 死ぬ!」と悪態をついた。

IV期; 3学期になると、一郎は学校生活に関係ある遊びを始めた。一郎がスクールバスの運転手になり、HTh を先生に、バス備え付けの人形を生徒に、KTh を PTA 会長にして遠出する遊びが続いた(61-64回)。その間、しばしば子供が行方不明や大怪我になった。或いは、一郎が「学校壊したる」と叫び、学校に大雪(砂)を降らせた。但し指吸いのある左手は決して砂を触らなかった。やがて一郎は運転手から泥棒やブラックデビル、さらにゴキブリに変身して、室内を乱暴に動き回った。そして先生役、PTA 会長役の HTh, KTh をマットレスに倒してサンドイッチにして葬った(66・67回)。こうして学校や生徒、先生などをやっつけた一郎は、3人で野球や運動会の遊びをするようになった。しかし、自分が失敗したり、負けたりすると、必ず再び Th をサンドイッチした。そして帰りに玄関横の外壁を蹴って帰った(68-72回)。幸い我々は一郎によって破壊されてしまうことのない確信に導かれていたので安心して耐え、待った。

V期; 小2になり、担任が障害児を担当していたベテランの男の先生に替わった。一郎の遊びも変化した。即ち医者・看護婦と患者、警察・犯人と被害者などの役割遊びのなかで、一郎は医者と患者、警官と犯人の両者を交互に演ずるようになった。そして時折事態が混乱して涙まじりに怒鳴ったりしたが、悪態をつくことが殆どなくなった(73・74回)。次第に落ち着いてきた一郎は、不器用ながら両手を用いてプラレールを始めた。プラレールによって一郎の旅は、夢のように拡がって行った。特急日本海に乗って大阪から金沢、青森まで旅行するという展開になった(75-78回)。夢中になって電車を動かし、WB に駅名を書いて説明する一郎の表情は、いかにも真剣で、それでいて嬉しそうであった。もっとも漢字の書き順は、一郎独特のもので

あった。そして時折説明に困ったときの一郎の顔は、必死の形相であり、痛々しかった。一郎は家でも電流で走るミニチュアの電車を買って貰って遊んだ。しかも、それをプレイルームに持ってきた(79回)。こうしてプラレールは一郎にとって切り離せないものとなった。しかし或る日自分だけのはずの電車が、他児名のボックスにあるのを見付け、しかも KTh が自分以外の子供の担当でもあることを知った一郎は、急にプラレールをやめ、ガックリした表情でクレーン車を砂場の枠から落とす遊びを繰り返した(81回)。KTh は、この時一郎にとって、いかに“significant person”(Rogers, C. R.)である存在であるかを痛感した。そこで KTh は、素直に一郎に謝り、改めて一郎が KTh にとっても大切な存在であることを伝えた。すると、一郎は収まらない感情を KTh にぶつけてきて、しばらく刀で徹底的に攻撃してきた(82-85回)。それから一郎がクイズの司会者となり、KTh に解答させて威張ったが、悪態は減っており、KTh が答えられないと、「僕でも0点とることあるから頑張りなさい」と励ましたりした(86・87回)。そして一郎の幼児語は減っていた。この間 HTh は一郎の側に立って、2人の動きを見守っていた。一方、運動機能促進のために勧めたスイミングスクールでの水泳において、一郎は「6m泳げた」と話してくれた。まさに夏休みの出来事であった。

2学期に入ると、一郎は砂場での池作りに熱中した。当初左手を決して使わなかった(88回)が、この時点から、一郎は KTh を母親のもとに返し、HTh と2人でプレイした。HTh は専ら水汲みの役目であったが、この時、HTh は心引かれる思いを残しながらも、自分が秋に結婚することを一郎に伝えた(90回)。一郎は思わず「H よかったなあ 頑張れよ」と言ったが、次の瞬間「離婚せえ」とも言った。しかし、一郎は荒れずに耐え、夢中で池を掘った。そして次回初めて左手を使って、池を完成させた。一郎は、その池を画用紙に描き、さらに母親と KTh にも見せた(91回)。KTh は、その池を見て、子宮と思った。一方現実場面における一郎は、スイミングスクールの先生が怖く、或る時さぼったが、あとで母親に「ごめんな、行きたくないけど、K が『心強うならなあかん』いうた 我慢する」と伝え、その後頑張った。運動会も2等になった。さらに友達も一人でき、その友達の家に初めて遊びに行った。やがて、HTh の結婚で3週間プレイが空いた。3週間後に現れた一郎は、81点・90点という計算テストの成績を持参して、いかに学校で頑張っているかを伝えてくれた。しかも、一郎自らが先生となって、実演した(92・93回)。

VI期:ところが、年末に HTh の妊娠となった。これは、一郎にとって大変なショックだったらしく、HTh に「赤ちゃん大事にせえな」と言いつつも、表情は淋しい顔だった(98回)。その後輪投げなどするが、失敗すると「やめよう」と根気がなくなり、全く元気がなかった(99・100回)。こんな状況が続くなかで、HTh の体調が悪くなり、残念ながら HTh は辞めることになった。その結果 KTh は改めて一郎と相對することになった。KTh に励まされた一郎は、意を決したように、自ら先生役になり、KTh を生徒にして「戸塚ヨットスクールを知っているか」といった調子でしごいた。姿勢が悪いと、ミュージックハンマーで叩いた。そして KTh の出来が悪いと、笑い転げて喜んだ。それを母親にも伝えた。しかし、ある時社会の郵便の場面で先生役がうまくやれず、突然「もう帰る」と叫んで出て行った(102回)。KTh は「ここを乗

り越えさせることが大切」と思ったので、一郎を抱きかかえてプレイルームに戻り「どんなに失敗しても下手でも一郎君が大好きだよ」と言った。すると一郎は「お前アホや 下手な奴は人間やない」とやり返し、しばらく KTh の胸の中でもがいた後に落ち着いた。

このことがあってから、一郎は退行的な遊びに入った。一郎はミルク飲み人形に興味を示し、「赤ちゃんになりたい」と訴えた。また帰り際に母親の膝に乗り、乳房を触りたがった (104・105回)。その後、一郎は砂場に行き、今度はダム作りを始めた (106-110回)。一郎は、深く、大きなダムを作ろうとした。ふと、一郎の独言が聞こえた。「町に水が流れ、家は壊れて人々は苦しみ、死んだ。そして苦しみは無くなった・・・」と (107回)。しかし水が砂に浸み込むため、怒った一郎は、それが KTh の責任であるかのように罵倒した。この時 KTh は、ダムが『新しい生命の誕生の源泉』に思えて、バケツやビニールを必死に工夫してダムの完成に協力した。ダムが完成した時、一郎は「やっと出来たな」と言って微笑した (109回)。KTh も嬉しかった。その次の回、一郎は砂場に立てかけてあった大きな板の裏に「落書していいか」と聞いた後、顔が『へのへのもへじ』からなる丸坊主の男児立像を描き、更にその横に『ななしのごんべはしねアホ』と書いた。それからその顔に向けて水鉄砲で「ななしのごんべえ しね！」と何度も叫びながら撃った (110回)。続く 111回には、母親の裸像を描き「お母さん嫌いや」と叫び、水鉄砲で攻撃した後、その足で面接室で待っている母親に「豚! お母さんの豚 嫌いや 俺不良少年になるんや」と叫んだ。

VII期; それ以来、一郎は母親もプレイルームと一緒に入るように求め、我々は、それに従った。3人でボウリングなどをするが、母親に対しては、「豚早くしろ!」と、命令調であった。そして或る時、一郎がマスクを被り、グリコ犯人を演じた時、母親がマスクを外した一郎に「可愛い」と言うと、「可愛いなんて言うな バカヤロウ」と怒った (115回)。こうして KTh の眼前で母親を思い通りに動かすことに成功した一郎は、やがて『目鼻口の整った母親の半身像』を描いた (118回)。さらに、次の回一郎は学校で応用問題が出来ないことから、ふと「どうして僕はこんなにアホなの」と独り口ずさんだ (119回)。やがて夏休みも終わり、9月に入った。一郎は、初めて家族画を描いた。その絵は、母親の怒っている顔を中心に右へ父親・弟の顔、左端に泣いてる自分の顔だった。絵を描き終えると、「俺が弱いのであかんのじゃ 勉強出来るようになりたいんじゃ」「馬鹿にすんなよ お母さん」と言い、WB の陰に行って泣いた (120回)。この姿に母親も驚かれ、しんみりされた。KTh は、「お母さん 一郎君は彼なりに真剣に考えているんですね。できるだけ一郎君の気持ちを聞いてあげましょう。」と母親に語りかけた。母親も大きく頷かれた。ところが数回後、一郎は、ふと「お母さんは、ここでは優しいが、家に帰ったらすぐ怒るねん」と言った。それから気を取り直したように、母親に対して「僕偉い? 僕強い?」と何度も聞いてきた。母親は暫く無言のあと「私が一郎を認めていないんですね」と、初めて涙ぐまれた (126回)。そんな母親は、プラレール電車の衝突の際、一郎が「どうして?」と言いつつ、悔しさから電車を一度は投げるが、気を取り直して電車を走らせる姿を見て、「私は苛立ち、待てずに手を貸したり、怒ってしまうのです。お父さんも一緒です。」と反省された (129回)。

Ⅷ期：或る日、一郎が早く来た為、入口で他の男児と鉢合わせした。一郎はプレイルームに入るなり、先の男児が作った町を蹴り飛ばした。そして、「俺は赤ちゃんになる」と言って、母親の膝に寝そべって母親の指を咬んだり、舐めたり、乳母車に入り、「オギャーオギャー」と泣き真似をした。その挙げ句に「帰ろう 早く帰ろう」と何度も叫びながら母親の手を引いて、ドアから出ようとした。KTh は、一郎の前に立ちはだかった。そして「逃げずに向かっておいで!」と胸を提示した。一郎も、KTh の気迫に「もはや」と感じて、必死の形相で向かってきた。次の瞬間、Th のネクタイをもぎ取った。KTh も怯まなかった。齒を食い縛って体当たりする一郎の目には、涙が溢れていた。KTh も胸に熱いものがこみ上げてきた。KTh は、涙顔を洗った一郎の顔をタオルで拭いてあげた (130回)。そして次の回、一郎は、母親と KTh の間に腰掛けてきた。一郎はしばらく居心地よさそうにいた後、独りで砂場に行き、独りで大きな池を作った。再生のイメージを連想した KTh は、「何に生まれ変わりたい?」と尋ねた。一郎は、すかさず「桃太郎」と応えた (131回)。

やがて終結のことを考えて、WISC 検査を依頼したところ、結果は $VIQ=64+\alpha$, $PIQ=66+\alpha$ と低く、一郎が目一杯学校で頑張っていることが痛感された。以後3月終結に向けて、一郎の気持ちの整理に入りたい旨母親に告げて、2人だけで話し合った。一郎は、KTh とテニスまがいの遊びをしながら気の弱い自分が強くなりたいと言った。そして KTh の小学校時代の体験などを聞いてきた。また一郎は「社会が得意で算数・国語が苦手」と訴えた。しかし、一郎が WB に書く漢字の筆順は正確になっていた (133回)。社会が得意という一郎は、鉄道が殊の外好きであり、数冊の鉄道写真集を持ってきて、詳しく説明してくれた。その時、一郎は「つばめ、あずさ・・・もなくなったなあ だんだん変わっていくなあ」と、しみじみ話した (134回)。そして、次回 WB に戦争場面を描き、「戦争は終わった 平和になった」と話すが、一郎は、ふと「4年生になったら、何クラブに入ろうかなあ 鉄道クラブはあるが鉄道キチがいるしなあ」と、4月からの学校生活のことを真剣に考えた。そして、何を思ったのか、次の瞬間横に座っている KTh の男の象徴を握った。KTh は驚いた。すると、一郎は「まあいいやん」と苦笑した (136回)。こうして最終回を迎えた。一郎は、しみじみと自分の生活史を振り返り、生まれた田舎の産婦人科のことや5歳の時の提防での事故など語った。そして将来は鉄道の車掌になりたいと結んで帰って行った (138回)。

なお、終結した年の夏休みに、一郎は元気な姿を見せにきてくれ、「友達も4人でき、力も強くなった 相僕しょう」と逞しくなっていた。

考 察

錯覚の世界にいる子ども

一郎は不器用さ、書字障害、知能指数の低さから、明らかに『一次的自律的自我機能』(Hartmann) が劣っている。それに、乳児期に殆ど泣くこともなく、『仏様』と呼ばれる程大人しく、母親が内職に専念できたということは、赤ちゃんが母親の手を殆ど煩わせなかったの

である。これは、赤ちゃんが‘泣く’という唯一の手段によって、母親を自分の思い通りに動かすという母親への‘絶対依存’（Winnicott）を促す力が、一郎に極めて弱かったことを示している。即ち母親からの‘抱っこ’（Winnicott）という赤ちゃんのパーソナリティの健康な発達にとって欠かせない環境のなかで、母親対象との‘一体感的な最高の共生体験’（Mahler, M. S.）を、一郎は十分獲得し、卒業しないまま乳児期を終えたのである。

しかし、一郎は彼なりに‘錯覚’（Winnicott）の世界で、毛布・指吸いという‘移行対象’（Winnicott）を創り出している。しかし、その移行対象が縫いぐるみといった2次的移行対象（Hong, K. M.）にとって代わられることなく小学2～3年まで続いている。これは、一郎が環境からの‘抱っこ・あやし・提示’（Winnicott）を強く喚起することもないまま、従って母親対象との‘絶対依存・相対依存・独立’（Winnicott）の過程を十分経験し、発達させられずに大きくなったことを意味している。即ち、一郎は錯覚の世界から脱錯覚の世界への移行がうまくいかなかったのである。一般的に、子どもは8カ月位から人見知りをし始め、いわゆる母親対象を“not-me”（Winnicott）なる存在である全体対象としての良い対象イメージ化ができるまでに発達している。ところが、一郎は、この段階で人見知りをしなかったこと、その後も聴力に異常がないのに祖父母の呼びかけに反応しなかったこと、弟の誕生に嫉妬をしなかったことは、一郎の内的世界において、対象に対する全体対象としての良い対象イメージ化が発達していなかったことを示している。

否定的な投影性同一視

そして、その後3歳から5歳にかけても、大きい音だけでなく、大人や子どもを怖がり、その上、母親に対してさえ、視線を合わせずにいること、さらに就学を1年後に控えて、母子で通所指導に現れた時の一郎の‘空間を漂っている視線’などから、逆に一郎にとって対象は、自己を脅かす存在として映じていたのである。つまり、一郎の内的世界において自己の持つ攻撃性、破壊性を対象に投影するという投影性同一視（Klein, M.）の自我機制が発達していたのである。ただし、外出時に視線を合わせないかたちで、母親の身体にしがみつくとすることは、母親の身体を部分対象（Klein）としては、良い対象イメージ化していたのである。そして、それは、指吸いという自己愛の延長線上のものとしての発達段階に留まっていたのである。

良い対象の拡がりへの第一歩

以上のことから、一郎の発達課題は、なによりも部分対象としての良い対象イメージに拡がりを持たせ、その上で全体対象としての良い対象イメージを、一郎の内的世界に構築することであったことは言うまでもない。そこで、グループ指導という制約のなかで、特定の女性セラピストによる一郎との個別的な関わりを持つことによって、一郎が既に獲得している部分対象としての良い対象の保護に努めたのである。その結果、他児を怖がり、指吸いだけの状態から脱してマンションを作ったのである。そこから、さらに一郎が自分の住んでいるマンションが良い対象としてイメージされていることが明らかになったのである。

やがて、不特定の対象に向けて電話で、或いは八百屋の主人となって呼び掛けを始め、対象からの反応を拒絶したことは、対象との相対依存の段階にまでは達していないが、一郎の内的

世界において、自分が主人公として万能感的に振る舞える良い対象を求め、同時に悪い対象から自己を守るという自我機制を発達させてきたことを示している。その機制は、そこからさらに一郎がTVの刑事と同一化して、悪い対象である泥棒を逮捕しようとする‘対象と関係し、対象を使用する’（Winnicott）段階へと発達している。

対象のなかの悪い対象殺し

この段階で、一郎にとって‘ほどよい母親’（Winnicott）であるセラピストとの1対1のプレイの場を保障されたことは、一郎が良い対象と関係し、しかも、対象を思い通りに‘使用する’（Winnicott）ことの機会を与えられたのである。一郎が一方的な問いかけに終始して、セラピストからの一切の問いかけを許さず、銃で殺した（37回）のは、まさにセラピストに白い画布になることを要求していたのである。即ち、自己にとって対象のなかの良い対象は捕まえておくと、悪い対象は捨てるというエリクソンの自律性の初期の段階の‘掴む―放す’図式の発達が、ここに至って出現したのである。

良い母親対象への償いと同一化

悪い対象を殺してしまった一郎は、砂場に何度も水を運んで入れた（38回）。これはその段階では池を作っているとは、とても思えなかったが、その後の展開からみて、一郎は再生するための池（＝子宮）を作ろうとして、うまく作れずにいたのかも知れない。ところが、その過程で水浸しになった床を優しく拭いてくれる良い対象、即ち排泄物の世話をしてくれる良い母親対象と出会った。つまり、悪い対象は破壊されたが、良い対象は一郎に殺され、破壊されてしまったのではなくて、生き残ってくれていたのである。だからこそ一郎は喜び、生き残った良い対象に対して、一郎は、手作りのケーキや紙袋、絵を39回から41回にかけてプレゼントするという‘償い’（Klein）‘思いやり’（Winnicott）を発達させている。そして、鏡映文字も見られるが、‘にしのみや’と書いてみせたことは、母親の「ここに来るのを楽しみにしています」の言葉の裏付けもあるように、良い対象が、どこに存在するかを一郎は伝えたかったものと思われる。さらに、そこから一郎の内的世界において、良い対象との同一化即ち良い対象そのものの取り入れをも発達させている。それは40回から44回にかけて、牛乳瓶を手にしての「おいちいH牛乳」、自分のTシャツマークを「H食品」、さらにミルク飲み人形相手に「Hはじめたん」と呼んで独り悦に入っている一郎の姿のなかに展開されている。

良い対象から生まれた子ども

「学校嫌やねん」と、学校そのものを悪い対象と思い込んでいる一郎は、良い対象との同一化を益々強く求め、遂に52・53回にセラピストが持っている良い対象（＝おっぱい）そのものとの一体感的な同一化を強く欲するまでになっている。しかし、ここで一郎は良い対象から拒絶を初めて体験した。この時、一郎は初めて良い対象が自分の思い通りにならない存在であることを認知したのである。そこで一郎は、対象を思い通りに支配するために、遜吾空に変身して、砂山（＝おっぱい）という良い対象を徹底的に攻撃している（55・56回）。これは、一郎がこれまでのセラピストを通じての良い対象との体験の積み重ねが、一度の良い対象からの拒否体験を圧倒していたことを示している。つまり、良い対象からの拒否が、即良い対象の悪い対象へ

の極端な転化を招かずに、拒否した悪い対象を砂山（＝悪いおっぱい）に置き換えて攻撃するという自我の置き換えの機制を発達させてきていることを物語っている。だからこそ、良い対象は生き残ったのである。そして、この頃からセラピストと視線が合うようになったことは、一郎が、やっと対象を部分対象の枠を越えて全体対象として良い対象をイメージできるまでに成長していることを意味する。それ故に、その後遜吾空の万能感的な力を利用して、一郎は2人の対象（セラピスト）を結婚させ、さらに一郎を真ん中にして3人で記念撮影をとり、2人の良い対象から、新しい子どもを誕生させた（58回）のである。

2人の良い対象の子どもとして再生した一郎は、次の発達課題に取り組んだのである。その課題は、どうしても思い通りにできないでいる現実の学校場面を、思いのままに‘対象と関係し、対象を使用する’（Winnicott）ために、遊びの場という中間領域に持ち込み、破壊し、脆弱な自我を修復することであった。そのために、自ら悪い運転手、泥棒、ブラックデビル、ゴキブリといった悪い対象に次々と変身して、学校の建物、先生、生徒、PTA会長を破壊し、葬ったのである（61-67回）。こうして生き残った対象（＝学校）から、一郎は野球、運動会を肯定的に取り入れ、勝てば喜び、負ければ怒る（68-72回）という自尊心の発達へと向かったのである。

自律性の芽生え

自尊心が芽生えてきた時期に合致して、小2の新学期から担任が発達上の問題を持つ子どもの教育のベテランに替わったことは、一郎にとって、良い対象である担任を通して現実世界に前向きに関わって行くことを促進されたと思われる。その一方で一郎が、医者と患者、警官と犯人というプラス・マイナスの2つの対象を交互に必死になって演じた姿（73・74回）は、世界に常に存在する2つの対象を自己の中に統合しようと試みている姿に他ならない。つまり、この役割遊びの体験を通して、子どもは或る事態に直面した時、これまでのように2つの対象世界のどちらか一方に自分をおいて、他方の対象世界を非難するだけという極端な反応に終始しないですむ両価性の統合に努めるのである。事実、一郎にとって良い対象である KTh が、自分だけのプレイ担当でないことを知った時（81回）、HTh から秋に結婚する旨を知らされた時（90回）、それは愛情対象の喪失の危機であった。しかし、一郎はクレーン車を砂場の枠から落とすという、自分を見捨てる対象と良い対象から見捨てられた自分を演じることによって、また池を夢中になって掘り、完成させて絵に残すという自分から去っていく運命にある良い対象の子宮（＝池）を形見に持つことによって、アンビバレンツな自己を統合的にコントロールしたのである。この‘自律性’の芽生えがスイミングスクールに行くのが辛いけど、一郎をして頑張らせたのである。

良い母親対象喪失の悲哀と克服

‘自律性’（Erikson, E. H.）を獲得し始めた子どもにとって、ある特定の場所（＝プレイルーム）に行けば、必ず居てくれた良い対象（＝HTh）が実際に消えていなくなるということは、‘悲哀’（Bowldy, J.）を強く体験することを余儀なくされ、自律性が脆弱になっていく。それは、良い対象である HTh が妊娠による体調不全によって一郎の前から去っていきなかで、「赤ちゃん

ん大事にせえな」(98回)という良い対象への‘思いやり’ (Winnicott)を示しながらも、根気がなくなり、「やめよう」(99・100回)「もう帰る」(102回)と投げ出した一郎の姿に見られる。そして、子どもが、このような状態の時、父親対象としての良い対象は、子どもにとって決して良い乳房を持つ母親対象になりえないのである。つまり、子どもが自律性を確かなものにするためには、子どもが自分の力で、改めて良い母親対象を現実には創り出さねばならないのである。父親対象は、その補助的存在（ダム作りを手伝う人）でしかないのである。事実、一郎は大きなダムを作る過程で「町に水が流れ、家は壊れて人々は苦しみ、死んだ。そして苦しみは無くなった・・・」(107回)と語るなかに、もはやこれまでの良い対象（＝HTh）との良き時代が洪水（＝妊娠）によって破壊され、良い対象との間で築いてきた自己像の死を表現したのである。そして、ダムの完成と共に一郎は、いまだ対象と関係を持たない‘ななしのごんべえ’ (110回)を誕生させて、次いで殺し、さらに‘対象と関係し、対象を使用する’ために母親対象（＝母親の裸像絵）を殺し、自らを不良少年、グリコ犯人に変身させている。

こうして母親対象を思いのままに使用してきた一郎は、実際には、自分が母親の期待に応える存在ではなくて、母親にとって‘アホで、弱く、怒られて泣いている対象’ (120回の絵)でしかないことを告白し、罪障感を強く感じるに至ったのである。つまり、精神的に去勢の状態にあったのであり、そのために良い対象から‘提示’ (Winnicott)されたものを、良い対象から見守られるなかで独りで居られる能力という‘独立’ (Winnicott)の過程を発達させることが出来ないでいるのである。これは、母親の「一郎を認めていないんですね」(126回)「私は苛立ち、待てずに手を貸したり、怒ってしまうのです。お父さんも一緒です」(129回)という反省から明らかである。しかし、一郎と母親の涙の出会い (120-129回)によって、一郎は母親のなかにやさしい受容的な対象を全体対象として認知した。

父親対象との対決と取り入れ

優しい受容的な対象に見守られるなかで、プラレール電車の衝突、破壊、修復 (129回)という自律性を取り戻した子どもにとって、次の発達課題は対象に果敢に挑戦し、対象をものにするという‘積極性’ (Erikson)である。そのためには、父親対象と対決し、その対象と同一化し、取り入れることである。しかし、それは簡単なことではない。一郎の場合、プレイルームの入口で鉢合わせした同じ年頃の男児 (130回)は、一郎にとってせっかく獲得した良い対象との居心地のよい環境を脅かす存在と映じ、その男児の作品を破壊したものの、自己の優位を保てなかったのである。そこで、逆に独りでいられる能力を放棄して、一郎は優しく受容的な良い母親対象との同一化（＝母親の膝で母親の指を咬んだり、舐めたりの行動）を選んだのである。ここで、KThが、以前に良い対象（＝HTh）を喪失した時に登場した父親対象と異なり、意識的に母親対象との同一化を断ち切って、父親対象との同一化を促進する存在として登場している。そして、涙ながらに必死に父親対象と対決した一郎は、今度は二人の異なった良い対象の住む池から‘ななしのごんべえ’ではない‘桃太郎’となって再生している。ここに至って、一郎は‘桃太郎’という父親対象を取り入れた理想の男性像と同一化したのである。そして、「4年生になったら、何クラブに入ろうかなあ。鉄道クラブはあるが、鉄道キチがいるしな

あ」という現実世界における自己の不安を自ら断ち切るかのように、父親対象の象徴を握る(136回)ことによって、現実世界へ積極的に関わっていく決断をしたものと思われる。それは、実際に「友達も4人で、力も強くなった。相撲しよう。」という夏休みの報告によって、一郎の‘積極性’という発達課題の達成と相成ったのである。

おわりに

本事例を今、こうして報告するにあたって、ひとつの疑問が消えない。それは、遊びという中間領域を子どもに提供する際に、筆者は数年前から、一人で母子を担当することが多い。その方が、母子の力動関係をうまく使用しやすいからである。その意味で、本事例の場合も、当初から母子に中間領域を同じプレイルームという空間で提供して、そこで展開される母子の葛藤を統合的に扱った方が、治療をより促進させることになったのではないかという見方もできる。しかも、通所グループ指導、母子並行面接、子どもの担当者の結婚、妊娠、別離という状況変化が、治療構造を一層複雑にしたのではないかということである。しかし、当時の筆者に、最初から母子の葛藤を統合的に同時に扱えたかは疑問である。

このように考えると、治療をいかに早く促進するかは、クライアントの発達障害という1次的自律的自我機能の障害の程度、2次的自律的自我機能の発達段階の程度、加えてセラピストの母子の力動関係を活用できる力量によるところが大である。そして、セラピストの力量は、治療に携わる者にとって、一生追い求め、研鑽に努めなければならないものであることを、常に改めて思い知るのである。

付記：最後に一郎君の、その後の成長、発展をお祈り申し上げます。さらに御両親、弟さんの一層のご発展とご多幸をお祈り申し上げます。なお本論文の脱稿に際して、現在2児の母親となって育児に専念されている柏崎（旧姓橋本）紀子氏に対して、当時の指導の至らなかった点を深くお詫び申し上げます。

参考文献

- A. Freud, *The Ego and the Mechanisms of Defense, The Writing of Anna Freud Vol. II*, International Universities Press, 1966, 黒丸正四郎・中野良平訳「自我と防衛機制」アンナ・フロイト著作集、第2巻、岩崎学術出版社、1981.
- C. R. Rogers, 畠瀬稔・阿部八郎訳「来談者中心療法」岩崎書店、1964.
- D. W. Winnicott, *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*, The Hogarth Press, 1965, 牛島定信訳「情緒発達の精神分析理論」岩崎学術出版社、1981.
- D. W. Winnicott, *Playing and Reality*, Tavistock Publications, 1971, 橋本雅雄訳「遊ぶことと現実」岩崎学術出版社、1981.
- E. H. Erikson, *Childhood and Society*, W. W. Norton, 1963, 仁科弥生訳「幼児期と社会」みすず書房、1977.
- E. Jacobson, 伊藤洸訳「自己と対象世界」岩崎学術出版社、1982.
- H. Hartmann, *Ego Psychology and Problem of Adaptation*, International Universities Press, 1958, 霜田静志訳「自我と適応」誠信書房、1967.
- 原俊夫・鹿野忠男編「攻撃性」岩崎学術出版社、1979.
- H. Segal, 岩崎徹也訳「メラニー・クライン入門」岩崎学術出版社、1977.

- 河合隼雄「ユング心理学入門」培風館, 1978.
- 北村圭三, 対象恒常性と「抱っこ」——同胞を噛む3歳児事例を通して——「神戸女学院大学論集」第32巻第2号, 1985.
- 北村圭三, 対象喪失の不安と対象恒常性——登校拒否児の母子面接を通して——「神戸女学院大学論集」第33巻第1号, 1986.
- K. M. Hong, The Transitional Phenomena: A Theoretical Integration, *Psychoanalytic Study of the Child* 33, 47-80, 1978.
- 北山修「錯覚と脱錯覚」岩崎学術出版社, 1985.
- M. Klein, *Love, Guilt and Reparation and Other Works Vol. I*, The Hogarth Press, 1985, 西園昌久・牛島定信編訳「愛、罪そして償い」メラニー・クライン著作集3, 誠信書房, 1983.
- M. S. Mahler, F. Pine, A. Bergman, *The Psychological Birth of the Human Infant*, Basic Book Inc., 1975, 高橋雅士他訳「乳幼児の心理的誕生」黎明書房, 1981.
- 小此木啓吾, 愛する対象を失うとき, 現代のエスプリ別冊「臨床社会心理学 成熟と喪失」至文堂, 1980.
- 牛島定信, 過渡対象をめぐる「精神分析研究」Vol. 26, No. 1, 1-19, 1982.
- S. Freud, 井村恒郎・小此木啓吾他訳「自我論・不安本能論」フロイト著作集6, 人文書院, 1983.

原稿受理 1988年9月9日